

## 総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成WGについて

令和3年9月30日 戸田市教育委員会教育長 戸ヶ崎 勤

荒瀬部会長、秋田委員、今村委員、中島委員の皆様を前に、大変僭越ではございますが、大きく2つの意見を述べさせていただくお時間をいただきいと存じます。

まず一つ目は、総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループの議論に関連して、教育課程部会として共通認識を持っておきたい事項について、8月18日の「総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループに向けたキックオフミーティング」に出席した際に発言した内容と一部重複する内容もありますが、発言させていただきます。

本日の教育課程部会でも「社会に開かれた教育課程」の議論がありましたが、変化が激しい時代の中、社会の変化をしっかりと教室の中に入れていくことが必要だと考えております。そのためには地域や民間企業との積極的連携も重要になってきます。このような話題について、広い視点から省庁連携で議論を深めることができる機会として、総合科学技術・イノベーション会議、産業構造審議会、中央教育審議会の委員がそれぞれ参画する教育・人材育成ワーキンググループは大変よい機会であると捉えております。

一方で、いくら熱い議論が行われても、それが都道府県から区市町村の教育委員会へ、そして学校の校門から入り、職員室、教室へと降りていくに従って、趣旨や魂が抜けていってしまっては意味がありません。学校の教師一人一人が、納得感を持って進む方向を理解し、一人一人の意識改革が行われ、その結果として行動変容が起こるような仕掛けを作っていかなければなりません。

そのためには、会議の在り方が、一部の先進事例のみを元に一からあるべき姿を創り出すという、言ってみれば「筋肉ムキムキ集団によるプロ試合の戦略会議」になってしまわないよう、注意しなければなりません。このような「演繹的思考」によって生み出される政策は、理想としては素晴らしいものかもしれませんが、それをトップダウンで現場に下ろしても、学校現場からは画餅に等しいと受け止められかねません。その代わりに、教育現場の既存の実践から「帰納的思考」によって、アメーバのように地道に政策を広げていくことも大切だと考えます。これまでも、日本の優れた教師たちは、意欲的に授業改善を行うとともに、子供たちに寄り添って一つ一つの問題に対応してきました。このような多くの現場の実践の蓄積を拾い上げ、着実に広げてアップデートしていくことが大切だと思います。一時の刺激的な尖った取組ならいざ知らず、今後、横展開しつつ継続的な取組とするためには、重視したい発想であると考えます。

他方で、今後の教育DXの時代にあっては、一人一人が自らゴールを設定し、自分の学びを調整するとともに、他者と対話し協働する力を育む学校教育が社会や産業をリードすることが求められると考えられます。そんな中であって、いわゆるダイバーシティ&インクルージョンという範囲をどのように踏まえ、多様なニーズのある子供たちを学校教育の中で個別最適な学びをどう実現し、学校外とどのようにリンケージするのか。また、そのプロセスにおいて多様な教職員集団を形成しながら、スタディールログ等の教育データを利活用してEBPMやEIPPを一層推進することなども当面の課題となってくると考えられます。さらには、眼前にあるカリキュラムオーバーロードの問題など真剣に議論する必要もあると思います。

今般の「令和の日本型学校教育」答申でも、多様化する子供たちへの対応など、今日の学校が抱える課題を指摘しており、これを正面から受け止め、国の会議として対応を考えていくことが必要だと思えます。なお、その際には、学校にとって過度な負担とならないよう、理念を提示するだけではなく、人的体制、物的体制の議論も表裏一体のものとして必要になるのは言うまでもありません。

第11期教育課程部会の大きなテーマとして、4月の会議で、荒瀬部会長からは「新学習指導要領の着実な実施に向けて、フォローアップをどう図っていくのか、それをどう私たちが見守っていくのかが大変重要」との御発言がありました。教育の専門家が集い、学校現場との距離も近い中央教育審議会としても、CSTI教育・人材育成ワーキンググループの議論の状況を共有する場を設けるなどしていく必要もあるのではないのでしょうか。

以上が、総合科学技術・イノベーション会議 教育・人材育成ワーキンググループの議論に関連した発言となります。